

まほうの鏡 かがみ

昔むかし、あるところに、ひとりの狩人 *かりん がいました。狩人は、毎日森へ狩りに出て、たくさんのえものをしとめました。

ところがある日のこと、いつものように狩りに出て、夕方まで走りまわりましたが、えものはいっぴきもとれませんでした。狩人は、

（えものを見つげるまでは、家に帰らないぞ）と思って、そのばんは森の中でねました。

朝になって、海辺 うみべ までやって来ると、すなはまに大きな魚がいつびき、うちあげられてもがいていました。狩人は、魚を海の中に投げもどしてやりました。すると、魚が、「お礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といいました。狩人が、

「何もいらないよ」と答えると、魚は、

「では、私のうろこを一枚 いちまい お取りなさい。助けが必要 ひつよう になったとき、そのうろこをもよせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といいました。

狩人は、魚のからだからうろこを一枚取って、ポケットに入れました。

それからしばらく歩いていくと、野原に出ました。そこに、とてつもなく大きな木が一本はえていました。狩人はその木の下でひと休みしました。うとうとしてみると、何かの音で目がさめました。起きあがってあたりを見まわすと、大きなへびがいました。へびは、木の上のワシの巣 す をねらって登っていくところでした。巣の中にはひな鳥たちがいるだけで、親のワシはいません。狩人はすぐさままてっぽうをかまえて、へびをうちころしました。そして、また横になってねむりました。

しばらくすると、親鳥たちが巣にもどってきました。そして木の下に狩人を見つけると、いつもひな鳥を取っていくのはこいつだなと思って、おそいかかろうとしました。そのとき、ひな鳥たちがさけびました。

「その人に手を出さないで。その人は、へびをやっつけてくれたんだよ」

それを聞くと、親鳥たちは、羽を広げて、ねむっている狩人のためにかげを作ってやりました。

やがて、狩人が目をさますと、親鳥たちは、

「子どもたちを助けてくださったお礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といいまし

た。狩人が、

「何もいらないよ」と答えると、親鳥は、

「では、私のしつぽの羽を一枚お取りなさい。助けが必要になったとき、その羽をもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といいました。

狩人は、ワシの羽を一枚取って、ポケットに入れました。それから、また狩りをして歩きましたが、その日もやっぱり、えものはいつぴきもとれませんでした。

つぎの日の夕方になって、ようやくきつねをいつぴき見つけました。狩人は、

「ほお、いいところにあらわれたぞ」といって、ねらいを定めました。するときつねが、

「どうぞ、わたしをうたないでください。かわりに、あなたのおのぞみの物をさしあげますから」といいました。狩人が、

「いったい、何をくれるんだい」ときくと、きつねはいいました。

「どうぞ、わたしのせなかの毛を一本取ってください。助けが必要になったとき、その毛をもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」

狩人は、きつねのせなかから毛を一本ぬいてポケットに入れ、またどん歩いていききました。

やがて、ある国にやってきました。その国のおひめさまは、なんでも見えるまほうの鏡かがみを持っていました。おひめさまは、国じゆうに、こんなおふれを出していました。

「わたしの目の前からすがたを消して、三日たってもわたしが見つけられない人とけっこんします。もし、かくれているのが見つかったら、その人は打ち首です」

これまでたくさんの若者わかものが挑戦ちようせんしましたが、みな失敗しっぱいしておひめさまに見つかり、打ち首にされました。おひめさまはその首で高い塔とうをたてさせました。

狩人はこれを聞くと、自分も挑戦してみることになりました。

狩人がお城しろに行くと、かくれるために三日間があたえられました。狩人は、はじめの二日間は、お酒を飲んで歌ったりおどったりして楽しくすごしました。「三日たったら、首を切られるんだぞ」と人にいわれても、狩人はただわらうばかりです。

三日目、狩人は、海辺へ出かけていって、あの魚のうろこをもやしました。たちまち、大きな魚が泳いできて、

「なんのご用ですか」とききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけられないところへ」

魚は、狩人を飲みこんでの中のなかにかくすと、深い海のそこへもぐっていきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゅうさがしましたが、狩人は見つかりません。

「これで終わりだわ。あの人とけっこんしなくては」

ひとりごとをいいながら、おひめさまは、もういちど鏡をのぞきこみました。すると、深い海のそこに大きな魚がいつぱきいて、その魚ののどから、青いぼうしのふさかざりがちらつとのぞいていました。

「見つけたわ。魚ののどの中にいるわ」と、おひめさまはさげびました。

狩人もどってきて、

「どうです。わたしを見つけれましたか」ときくと、おひめさまは、

「あなたは、魚ののどの中にかくれていましたね」といいました。

「そのとおりです。しかたがありません。わたしの首を切ってください」

けれども、おひめさまは、

「あなたほど上手にかくれた人は今までいませんでした。だから命はとりません。どこへでも行ってしまいなさい」といいました。

しばらくすると、狩人は、

（もういちどおひめさまのところへ行ってためしてみよう。首がなくなっただってかまいやしない）と考えました。そして、お城へ出かけていきました。

こんどは、狩人は、野原へ出て、ワシの羽をもやしました。たちまち、ワシがとんできて、

「なんのご用ですか」とききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけられないところへ」

ワシは、狩人をせなかに乗せて空高くまいあがり、天のはてまでとんでいきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゅうさがしましたが、狩人は見つかりません。

「こんどこそ終わりだわ。あの人とけっこんしなくては」

そういって、さいごにもういちど鏡をのぞきました。すると、天のはてをわしが一羽とんでいて、そのせなかで青いぼうしのふさかざりがひらひらしていました。

「見つけたわ」と、おひめさまはさげびました。

狩人がもどってきて、

「わたしを見つけれましたか」ときくと、おひめさまは、

「あなたは、ワシのせなかに乗ってましたね」といいました。

「そのとおりです。さあ、わたしの首を切ってください」

けれども、おひめさまは、

「いいからお帰りなさい。こんども命を助けてあげましょう。でも、もう二度と来てはいけませんよ」といいました。

ところが、しばらくすると、狩人は、またお城に出かけて行って、

「もういちどやってみます。三度も失敗したら、どうぞ心おきなくわたしの首を切ってください」といいました。

狩人は、こんどは森へ行って、きつねの毛をもやしました。たちまち、きつねがあらわれて、

「なんのご用ですか」とききました。狩人は、きつねにいいました。

「ここからお城の中まで、あなをほってくれないか。おひめさまが鏡を見るときすわる、いすの下までほってほしいんだ」

きつねはすぐにあなをほりはじめました。あなができると、狩人はもぐって行って、おひめさまのいすの下にかくれました。そして、おひめさまがしきりに鏡をのぞきこんでいるあいだ、いすの下から、針^{はり}でおひめさまのおしりをちくちくさしました。

おひめさまは、世界じゅうさがしましたが、こんどはどうしても見つけれませんでした。

狩人がもどってきて、

「どうですか。わたしを見つけれましたか」ときくと、おひめさまは、

「いいえ、見つけれなかったわ。いったいどこにかくれていたの」といいました。

「わたしは、あなたのいすの下にかくれていました。そして、あなたが鏡を見ているあいだ、針であなたをつつきました」

おひめさまはそれをきくと、

「ああ、なんだかちくちくしたのはそれだったの」とさげびました。

こうして、狩人はおひめさまとけっこんして王さまになり、ふたりはいつまでもしあわせにくらしました。

* 狩人 鳥やけものをとってくらしている人。 獵師^{りようし}

出典 『語りの森昔話集 1 おんちよろちよろ』 村上郁再話
原話 『世界の民話 13』 小澤俊夫／ぎょうせい